

関 係 各 位

福岡県米・麦・大豆づくり推進協議会  
(事務局：J A 福岡中央会 担い手・営農サポートセンター)  
(公 印 省 略)

営農情報 7

《トビイロウンカ（秋ウンカ）の注意報発表》

本年は、トビイロウンカの飛来時期が平年より早く、発生量も坪枯れが多発した昨年より多く、福岡県農林業総合試験場（福岡県病害虫防除所）から、7月14日に注意報が発表されています。

今後、ほ場内で急激に増加し、収穫前の「坪枯れ」につながることも懸念されますので、発生状況に十分に注意してください。

○トビイロウンカ発生状況（7月2半旬調査 県内43地点平均）

	本年	平年	前年
10株当たり払い落とし虫数（頭）	2.2	0.0	0.0
発生ほ場率（%）	76.7	1.9	0.0

・10株当たり払い落とし虫数は要防除水準を超えており、発生ほ場率とともに、過去10年間で最も多い。

〈防除上、注意すべき事項〉

【要防除水準】トビイロウンカ：幼虫の合計数

- ・飛来後第1世代（7月中旬～下旬）： 20頭/100株以上
- ・飛来後第2世代（8月中旬～下旬）： 100頭/100株以上

- ・本年は複数回の飛来が確認され、様々な生育ステージのトビイロウンカが混在しています。ほ場の発生状況を確認し、早期水稻は7月下旬の出穂期防除、普通期水稻は7月下旬から8月の基幹防除を徹底しましょう。発生パターン図を参考に効果の高い幼虫の時期に防除を行いましょう。
- ・出穂後は薬剤が株元まで到達しにくくなるため、防除にあつては、薬剤が株元まで確実に届くよう丁寧に散布し、散布後に防除効果を必ず確認しまししょう。
- ・アプロード剤は残効が長い特徴がありますが、近年、効果の低下も見られますので、必ず他のウンカ用薬剤と混用して使用しまししょう。
- ・7月に入り降雨が多いため、いもち病の発生にも注意しまししょう。
- ・本年は、コブノメイガの飛来も多くなっていますので、多発の場合はウンカ類と同時防除を行いまししょう。
- ・降雨のため、粉剤及び液剤の散布が難しい場合は、粒剤の使用も検討しまししょう。
- ・薬剤防除にあつては、周辺作物への飛散防止に努めるとともに、農薬使用基準（使用時期、使用回数等）を確認し、適切な薬剤散布を心がけまししょう。

(参考資料)

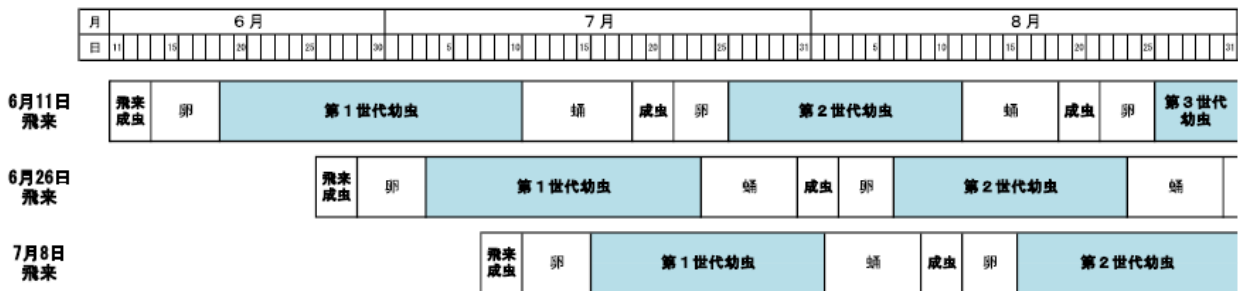
図1 トビイロウンカ発生予想パターン図



(注) (1) 発育零点12.0℃、発育上限温度28.5℃、発育停止温度33.0℃、有効積算温度(成虫期間100.0℃・卵期間109.4℃・幼虫期間189.4℃)  
 (2) 気温はアメダス太宰府を使用(7月13日まで実測値、以降は平年値)。

図1 飛来に基づくトビイロウンカの発生予想パターン図(令和2年7月14日作成)

図2 コブノメイガ発生予想パターン図



(注) (1) 防除適期は発蛾最盛期から1週間後である。  
 (2) JPP-NETの有効積算温度計算シミュレーションを用いて算出した。  
 発育零点(卵13.0℃、幼虫12.5℃、蛹14.2℃)、発育上限温度28.5℃、発育停止温度33.0℃、有効積算温度(卵50.0℃、幼虫250.0℃、蛹90.0℃)  
 (3) 気温はアメダス太宰府を使用した。(7月14日までは実測値、以降は平年値)

飛来に基づくコブノメイガ発生予想パターン図(令和2年7月15日作成)

以上